異にするに過ぎずといふにあり（祕密辭林）。大傳法院賴瑜僧正の薄草子口訣に妙見法と北斗法とは開合の不同なり。合する時は妙見といひ、開く時は北斗といふ、妙見色々の利益方便の時に七星と顯るゝが故に、妙見、七星を持す等あるは即ち是なり。是等の事も一般信仰に北斗北辰を混同せる原因となれるなるべし。此事につきては猶研究を要すべし。（完）

「南洋」の意義

文學士　内田寛一

一

南洋（南海）なる語は從來邦人に膾炙せられてゐたが、特に昨秋我が海軍の活動以來は、南洋熱一層高まり、新聞に雜誌に喧傳せらるゝ南洋の記事は、實に應接に遑なからんとする盛況を呈し、今や「南洋」は一種の流行語となつた。然し此語の意義が甚だ明瞭を缺ける爲めに、不便を感ずる事少からざるは、啻に余輩のみに止るまいと想はれる。

近時我國では、南洋なる語で指示せられた記事の多くが、東南亞細亞馬來多島海地方を意味して居つた所から、南洋といへば直に此地方を聯想せしむるまでに、南洋なる語と此地方とが密接に結び付けられてゐるかの觀がある。此故に新占領獨逸領ミクロネシアが、南洋として紹介せらるゝや此地方も亦馬來多島海地方のそれと、事情を同じくせるものならんとは、蓋多くの人々の間に抱かれた想像で、尙現に左樣であるやうであるが、其誤解である事は喋々を要しない。

然して一方では、更に進んで「南洋」の語義より見て、新占領南洋諸島を南洋と呼ぶは、不合理なりとする說さへ聞くに至つた。其理由とする所は從來吾等が親んだ「南洋」が馬來多島海地方なるが

如く、歐米人の所謂「南洋」は、赤道以南を意味するを以て、赤道以北にある新占領地は此に含まれずとの意見であるらしい。果して然りとせば、「南洋」は赤道以南の海を意味し、「南太平洋」の略字の如く思考せられるが、是果して南洋の眞義に恰當せるや、否や。南洋研究の勃興せる今日、西洋人の所謂「南洋」なる意義を考察したいのが本稿の趣旨である。

二

南洋といふも南海といふも、素と同義で、歐米人は主として後者を採用して、英語ではサウスシー、獨逸語ではジユードゼーといつてゐるが、其意義を詮索せんとせば、勢其起源に溯り、又其變遷を見なければならぬ。

此語の案出者は、確かバルボア（Vasco Nunez Balboa）で、時は西暦一五一三年の事である。新大陸發見の後、中央亞米利加なるダーリエン地峽に、西班牙の小植民地が樹立せられ、バルボアは知事として彼地に在つたが、元氣旺盛にして劃策に富むと評せられた人だけに、其地方の探檢に熱心であつた。大陸發見より程遠らぬ當時にあつては、中央亞米利加でさへ、歐洲人の智識に上つてゐたのは、大西洋方面に限られて、其地が地峽を形づくれる事さへも分らなかつた。此の山を越せば、彼方には廣き海を控ねた黃金に滿てる海岸があると、印甸人の酋長に聽いた、バルボアはチユクナク川の溪谷に沿ひて指されたる山 Sierra de Quarebua の頂へ登つたが、果せる哉、行く手に當つて、際崖なき大海原が、千古の秘密を藏せる面持で、彼の眼前に展開してゐたのであつた。

東印度への通路は、コランバス以來幾多の人士によつて、切望せられ、探檢せられたるも、大陸に障碍せられて、其目的を達せず、新大陸が印度

ならざるべしとは之を感得したりとするも、コルディーリエラ山脈の彼方は陸か海かも尙不明であつた。バルボアが海の存在を見たのは、正に一大發見である。彼は其海濱に至つて、之を西班牙國王の有なりと宣言し、此海をば南の海 Mar de Suu と呼んだ。之が即南海洋なる語の起源であり、此事が亦太平洋の發見となつたのである。(一)

然らば彼の所謂「南洋」は如何なる意味であつたか。ダーリエン、即今のパナマ地峽附近では、中央亞米利加の地は、東西に亙り、南北に海を控えてゐる。北なるはカリブ海で、南なるは即太平洋である。彼が後者を南の海と稱したのは前者を北の海 Mar de Norte といふに對せしめたもので、全く地形に基いての方位の考から起つたものである。換言すれば、中米の地峽を界とし、南北の位置によりて、命じた相對的方位上の名稱である。緯度の事などは、實際彼の問ふ所ではなかつた。

然し當時の地理上の智識で、此地方を南緯に在りと思惟したる爲めに、「南海」の「南」は南緯の「南」と誤解せられたるにはあらずやとの疑問あらんも此地峽が北緯にありとは、當時既に認識せられたる所であるから(二)南海といふも、別に南緯に在る海といふ意味を暗示せぬ事も、自明の事實といはねばならぬ。

三

此に注意すべきは、歐米人の所謂南海は、バルボアのそれと沒交渉に、其以前に支那人より傳聞せし事なきかといふ事である。尤も支那人も古くから、東西南北の方位を以て、土地を呼んでゐて南海の名稱も郡の名としては、既に秦代に之を見爾後其地は多少の異同あるも、亦かゝる名稱はある。特に漢族が次第に江南に發展するにつれて、印度支那半島地方との交渉漸く繁く、降つて明代となつては、航海術の進歩と共に例の大航海者鄭和

の十數回の南方遠征によつて、漢族の威風を發揮せし頃、南洋の事情も漸く明かとなり、一時大に支那人の南洋熱を煽つた事がある程である。されば當時「南海」の事情をものした書籍も相當にあるし、南海なる語も彼等の間に通用してゐた事であるから、直接又は間接に南海なる語が西洋に傳播したであらうといふ事は、強ち否定せられぬ事と信ずるが、バルボアの時代に至る迄に、其證左として擧ぐべき確實なる資料はない。

又一方では、例の亞剌比亞の古き時代の東方航海者の間に、馬來地方の事を南海、南洋、又は之に似た意味の言葉で總括した地方があつて、其名が西洋人に傳つた事なきか、との疑問もあるが、個々の海陸の地名の外、斯くの如き地名を其地方に發見する事が出來ぬ。從つて歐米人の用ふる南海なる語は、前に述べたるバルボアの創案によるとなすのが最も妥當であると見なければならぬ。

次には、南海なる名稱は兎も角も、太平洋の存在に對する支那人の智識とバルボアの發見と及南海なる語との連絡はなきかの疑問がある。支那人は古くより東に瀛海ありと、傳ふるも、亞細亞の東に海ある事は、西洋でも古くから考へてゐる事で、時代の前後はあるにしても、それが今の太平洋の如く廣漠たる事に氣付かなかつたのは同軌である。例の鄭和の時代に於てすらも、馬來多島海を越えて、東進する事がなかつたので、太平洋の存在といふ事が、明かに彼等に認めらるゝに至らなかつた。其之を見るは是より後の事である。然し流石は當時の先進國だけに、大西洋にあらざる「茫漠たる大洋が亞細亞の東にある」事は、バルボア以前、少くとも之と同時代にバルボアとは沒交渉に之を知つて居つたと見ゐて、ペレステロ Rafael Perestello や、アンドラデ Andrade が一五一〇年代に支那から歸つて、右の由を述べた事があるが

(三) 故に、太平洋の發見者を直にバルボアなりとするは、聊が早計の嫌なきにあらねど、支那に於て何時何人に依りて、如何程迄知られたるかは不明で、バルボアが陸か海かも知られなかつた米洲の西に大海洋を發見した塲合とは庭徑があると見なければなるまい。加之上述二人の中、先着のペレステロが支那に入つたのは一五一四年、印度に歸つたのは一五一九年で(四) バルボアの發見の年に後るゝ事、及當時支那には「南海」と交渉ある太平洋を指せる名稱もないのである。此故に歐米人の所謂南海なる語は、太平洋發見と同時に而も太平洋てふ語に先ちて起つた名稱と見て差支ないのである。

四

太平洋の存在は認められ、其廣漠なる事は想像せられても、其海の境域は、バルボアを始め未だ何人も之を知るべき由がなかつた。從つて所謂南海が今知らるゝが如き廣大なる海洋であらうとは夢想だもされなかつた。其實際の廣さが紹介せられたのは、一五二二年キツトリア號歸着後の事である。此船はいふまでもなく、マヂエラン世界周航探檢隊の一船で、マヂエランの訃音と、其航海の事情とを齎らして、辛くも本國へ歸着し得た船である。

マヂエランが有名な最初の太平洋横斷の壯擧はバルボアの南海發見に後るゝ事七年で、彼が出發に先ちて、葡萄牙の Martin de Bohemia の海圖に後のマヂエラン海峽に比定すべきものあるを見、(五) 又一五一五年のシエーチルの地球儀を見たりしとするも(六) 太平洋がかくまで渺茫たる大海洋ならんとは想ひも設けなかつた。さればこそ、海峽通過後に、見渡す限りの海原が平穩なるを見るや、高をくゝつて、先へ先へと邁進した譯で、之が偶然にも太平洋横斷の結果となつた事は、歐亞

間の經度の大なる違算が、コランバスを驅つて、新大陸發見の遂行を來さしめたるを聯想せしめるのである。實際航海して彼等は、「人の想像も付かぬ程の尨大なる海」（七）と感じたが、其頃案外「太平な海」El Mar pacifico であつた所から、此の名がやがて太平洋の名稱となつた事（八）は人の能く知る所である。

南米は今の濠洲であるとか、此等は連絡してゐるとか（九）、或は支那 Gataio は遙に東南に伸びて、今のタスマニアの邊に及べり（十）などいふ謬見は、當時の學者間にも勢力ある智識とせられて居つたので、先にカブラルが發見して、Terra de Santa Cruz と呼んだ南米東岸地方の屬島の名稱ブラヂル—此名は後南米大陸の一部の地名と變つた。——の名を、或は今の濠洲（當時の假想大陸）に當て（十一）、或は之をチモール島の邊となし、（十二）又或は之を今のニユーギニアの南、濠洲の北に置くもあつて（十三）實際其處置に迷惑を感じた跡が、歷々と推察せられるやうな時に當つて、マヂエランの航海は、漸く此等の誤謬を解き、濠亞の分離、米濠の相異を明かにし、此等大陸の間には、實に想像も付かぬ太平の海が湛へてゐる事を世に紹介したのである。

是に於てか希臘時代より想像せられ、後確められた亞細亞の「東方の海」即「東海」と、所謂太平洋とは、連絡せる事も自明の事實となり、亦之とバルボアの所謂「南海」との間にも、此等を區劃すべき障碍なき事も證明せらるゝに至つた。かゝる地理上智識の大發展の結果、「東海」「太平洋」「南海」等の名稱が如何に取扱はれたるかは興味ある問題である。

五

今の大西洋を「西洋」Oceanus Occidentalis 又は Mare Occidentalis といふに對して、亞細亞の東方

の海を「東洋」Oceanus Orientalis といふは、マヂエランの周航後に於ても、暫くは依然として用ひられた名稱である（十四）。之は太平洋の發見證明が、早速一般に知れ亙らなかつた事にもより、又慣用語であつた事にも依らう。然し年經るに從ひて、「南海」も「太平洋」と共に次第に通用せられたが、當時如何なる意義を以て適用せられたかは注意すべき事ではあるまいか。

一五二九年のリベロの地圖（十五）及び一五四二年のアロンゾの地圖（十六）にも、「南海」の名は赤道の北、中央亞米利加の南方に記入して、バルボア發見時代の事情を其まゝに表示し、太平洋上其他の名稱を記入する事なきも、十六世紀中葉に出版せられたる地圖、地球儀の類に徵すれば、叙上三つの名稱の併用せられた事が分る。中には各名稱發源の事情によりて、記入の處を異にせるもあるが、其等の多數は人をして各名稱の指示せる範圍を推すに苦しましむるのである。

一五四八年ベヲチア出版のトレミーの地圖（十七）には「南海」「東海」を太平洋上に南北に記載し、同年ビエレデスセリヤス（十八）のものには、南緯に「太平洋又はマヂエラン海」、北緯に「南海」を記し、一五六一年のトレミーの地圖（十九）には「太平洋」と「マヂエラン海」とを併用し、一五五六年ミラン出版のギラブワの地圖（二十）には「南海」のみを用ひ、一五七〇アントウエルプ出版のオルテリウス（二十一）、一五八七年メルカトル（二十二）及び一五九三年コルヲリウス（二十三）等の諸地圖には「南海」を大書し、太平洋の名を細書してある。一五九〇年クワーヅスのものには（二十四）「マヂエラン海」を用ひ、一五九九年倫敦出版なるハクルイトの地圖（二十五）には始めて英語「The South Sea」によりて太平洋を意味し其他の名稱を記入してゐない。

余は地理上智識の進歩が直に地圖又は地球儀上

に表はるといふ者でもなく、又廣大なる太平洋上の記載文字によりて、其意義其境域を正確に知るべしと斷ずるものでもないが、以上列擧したる所によりて考ふれば、十六世紀前半に於ては、上述の三名稱が併用せられ「東洋」の語も擴張せられて太平洋を意味するに至りたるも、同世紀後半に於ては、其本來の意義に因りてか、「東洋」は漸く廢れて、「南海」は「太平洋」と共に太平洋の名稱として漸次流布したるを察すべきである。「マヂエラン海」の如きも、時々之あるを見るも、こは當時にありても少數で、一般に使用されてはゐない。而して「南海」と「太平洋」との關係につきては、或は之を並用し、或は其一を以て、太平洋を示せる事あるも、同世紀に於て、已に明かに兩者の一致を表示せるを見るべきものがある。而も兩者並用せるものにありても、「南海」は「太平洋」の北に置きて南緯のみの海を指示せしめらるゝ事なきを常とする。唯一五五二年カラボーダの地圖（二十六）に「南海」を赤道と南回歸線との間に記載し、一見そが南緯の海を意味するかの感あらしむるものあれど、太平洋上に其他の名稱を用ひざるが故に、之を以て圖上の位置のみを意味すると見るよりは、太平洋の謂に用ひたと見るが妥當ではあるまいか。

東洋なる語が廢れ、「南海」、「太平洋」なる語が漸く廣く用ひられて、共に太平洋を意味するの趨勢が、十七世紀に入りて、益顯著となるは、一六五〇年のヤンソニウスの太平洋圖（二十七）に「南海」を赤道の兩側に記し、其南に「太平洋」の名を書きて明かに「南海」を南北兩緯の太平洋を意味せしめ同年同者の南極地方圖（二十八）には「南海」と「太平洋」とを同しとしてゐるのでも分るであらう。

更に下つて、十八世紀に入り、一七一〇年のマツバムンヂ（兩半球圖）（二十九）を見るも、「南海」即「太平洋」として、南北兩太平洋を意味せる事に變

化はない、只南海に更に、南海、秘露海、智利海等の區別を示して、「南海」を廣狹兩義に用ひたのが、目新しい事であるが、此頃は両米大陸西岸地方の地理も漸く知られたる時であるから、各地方の海の名稱の起つたのも當然と見なければならぬ。其廣義の「南海」と「太平洋」とを同一視する事は、此後も繼續するのであるが、其間に太平洋上探檢進歩の結果、「南海」即ち「ポリネシア」といふ狹義の現はれた事は看過すべからざる事である。

六

此に所謂「ポリネシア」を考ふる爲めに、少しく話の前後するを忍び、尙ほ其概略を述べねばならぬ。マデエランの太平洋横斷の後、西班牙、和蘭、英吉利等諸國の航海者にして、十六世紀後半より十七世紀に亙り、彼の後を追ひて、太平洋の探檢を試みるもの陸續相踵ぎたる結果、洋上陸地の發見は其冒險努力の報酬として、彼等に授けられた名譽であつて、モルツカ以東、洋上の新世界は、幾世久しき孤獨の幕を開いて、新なる光明に浴する事となつた。勿論十六、七世紀の探檢は、實利主義で、島嶼の概念を得たるに過ぎぬ。其科學的精査の餘地は、寧ろ多大で、此等は以後の探究家を俟つて、始めて闡明せられたのであるが、島嶼、群島の名は十八世紀前期に至るまでに紹介し盡されて、殆ど殘す所なき進歩を呈し、此にポリネシア—八十島の意—の名稱は此地方に命せらるゝ事となつた。而して主として此地方を「南海」で表示する事が此頃から起つたのである。

此名稱は、十七世紀の頃、モルツカ、比律賓及ヂャブワ等諸島に關する著者連の意に出でたるものを、一七五六年巴里出版の航海史に始めて採用せられたもので、後の地理學者が世界の區分に、第六の地方と指示した處である。其範圍は今のマリアナ群島からイースター群島に至る間の無數の

島嶼、群島を包括してゐるから（三十）、此の中には十九世紀地理學者によりて、細分せられて現今通用せるポリネシアは勿論、ミクロネシア、メラネシア等即太洋洲を含むものである。

此故に南海即「ポリネシア」地方とすれば、馬來多島海地方を除外する事となる。地理上の探檢が進捗するに從ひ、太洋洲と此地方との地理的條件の相異も明かとなり、近世此地方に活動したる葡萄牙、西班牙、和蘭、英吉利等諸國人が次第に「南海」の語を此地方に用ゆる事少なくなつた事は實際で、近時歐米人の所謂「南海」の多數が大洋洲を指示してゐても、現今彼等は此地方に全く「南洋」の語を用いない譯ではなく、南海即太平洋とは現に依然として彼等の認むる所である。

七

之を要するに、歐米人の所謂南海（南洋）なる語は、一五一三年バルボアの言に起つて、中央亞米利加の南方に位する事に因んだものが、地理上智識の發達するに從ひ、マヂエランの所謂太平洋と一致し、更に轉じて、大洋洲地方の海洋を意味する傾向を表せるも、尙マレイ多島地方をば、此範圍より全く除外する事がない。されば南海なる語は當初より依然として、南太平洋てふ狹義にあらざるは明かで、又現今かゝる名稱を太平洋以外の海洋に見る事がないのも解せられる（三十一）。バルボアの所謂「北海」は其後更に擴張せられて、暫く大西洋を意味したる時代あるも、後全く廢れたが獨り「南海」のみは、彼の發見に係る太平洋の名として存續してゐるのである。但南海即太平洋といふも、比較的探檢の後れたる其北方部に對しては此語の慣用上適用せざるを普通としてゐる。其北の限界は判然しないが略北回歸線と見れば、大して間違はないであらう。此の範圍に含まるゝ新占領南洋諸島を以て、南洋と稱するの不當を唱ふ

るが如きは、何等理由なき事といふべきである。

八

本稿に於ては、歐米人の所謂南海即南洋の意義の考察を主眼としたる事は、前に述べた通りである。然し「南洋」の意義の全般より考ふれば、支那日本のそれも考察するの必要ある事は勿論であるから、此に唯一言附記して置かう。支那では南海の語は、其起源古く、「南洋」の語は比較的新しい。之によつて指示せる範圍は、時代によつて必ずしも同樣ではないが、南海、南洋共に同意義で、支那の「南の方の海」を意味するものである。南の方といふも、單に支那南部の海の謂のみでなくて、支那以南の海にも通ずる。支那南部といふも版圖の伸縮によりて其廣狹を生ずるが故に、時代によりて不同であり、又版圖といふも、眞の版圖たると、彼の所謂朝貢國とがある。而して必ずしも其勢力範圍のみを指さず、漠然南方の海といふ意味にも用ひてゐて、東南亞細亞地方のみならず、セーロンの邊までをも含めた事があり、時には印度を界として南洋を東南洋、西南洋と區分し、後者に印度より亞弗利加の東北邊までを含めた事もある。其南洋の北限を考ふるに、時に北回歸線を越ゑて流球までも包含せしめた事はあるが、大體に於て北回歸線を限界と見てもよからう。されば北限及び東南亞細亞地方を南洋と呼ぶ事は、歐米人のそれと略一致するが、其範圍の西に擴張せると、歐米人の發見に係る大洋洲の中ポリネシアを除外せるとは相異せる所で、又南米の東海を西南洋又は大西南洋といひ、其西海を大東南洋と呼び、亞弗利加の西南海を西南洋などゝ稱した事のあるのは其等大陸から見た方位上の考から起つたものである。

日本でも方位に依つて近海を命じ其臨海地方を海名で呼んだ事はある。現時の所謂南洋、南海なる

語は初め其意義と共に支那から輸入したものを、多少日本標準にした形跡はあるが、大體に於て、「南蠻」の代用語として之を使用したものである。明治時代に於て、盛に「南洋」の語が使用せられたのは、十七年マーシャル群島に於ける日本漂流民殺害事件頃よりの事で、當時にあつては、此語は支那傳來のものにしても、其意義は寧ろ歐米人のそれを採つたものと思はれる。

最近我國に於て大洋洲については普通此語を用ゐないが、南洋、南海てふ語は、近時絕えず邦人の間に使用せられたもので、特にミクロネシア地方に對しては、明治の初期より、常に此語は使ひ慣らされてゐるのである。

以上支那及び日本の「南洋」を瞥見しても、少くとも新占領地を南洋にあらすといふの妥當でない事は一層明白といはねばならぬ。

附記、東南亞細亞と新占領南洋とを區別するに世俗、前者を表南洋後者を裏南洋とするも、こは甚だ面白からぬ呼稱である。故に普通我國で此語によりて指示せられる馬來多島海地方は之を馬來南洋とし、後者は若し日本の永久占領たらば之を「日本南洋」又は「我が南洋」と呼んだ方がよからうと思ふ。

註

（一）Peschel; Geschichte der Erdkunde. München, 1877 S. 262
Collingridge, George; The Discovery of Australia. Sydney, 1895. P. 129
History of the Two America. Baltimore, 1884 P. 95

（二）Nordenskiöld; Facsimile-Atlas. Stockholm, 1889 XXXIII, XXXIV, XXXVI, XXXVII. 等

（三）（四）Collingridge, Ibid. P. 129

（五）（六）Nordenskiöld; Ibid PP. 76-77

（七）マチエラン探險隊の一人で始めて其事情を公にした

（八）マキシミリヤンの文言

（九）Collingridge; Ibid PP. 89-90, 132

(十) Collingridge ; Ibid. P. 133
(十一) 〃 〃 PP. 90-91, P. 132
(十二)(十三) 〃 〃 PP. 90-91
(十四) Nordenskiöld, Ibid. XLI, XLIII, XLIV, XLV
〃 ; Periplus. Stockholm. 1897
XLIV, XLVIII 等
(十五) 〃 〃 XLVIII
(十六) 〃 〃 L
(十七) 〃 〃 LI
(十八) 〃 Facsimile-Attas XLV
(十九) 〃 〃 XLV
(二十) 〃 〃 XLV
(二十一) 〃 〃 XLVI
(二十二) 〃 〃 XLVII
(二十三) 〃 〃 XLVIII
(二十四) 〃 〃
(二十五) 〃 〃
(二十六) 〃 Periplus XXVI
(二十七) 〃 〃 XVII
(二十八) 〃 〃 VIII

(二十九) Nordenskiöld ; Perirlus. LIX.
(三十) Ellis; Polynesian Researches
Vol.1 P. 3
(三十一) (1701-13) 西班牙繼承事件に際し、英國の南海會は南米東西兩岸の通商を目的としたるも、之を以て南米東岸を南海と稱せし確證とする事能はず。

古地圖、地球儀に表はるゝ「南海」の綴りは其筆出版作製の國によりて、多少の相異あるは勿論にして、又當然なるが、今試みに其數個を列擧すれば

La Mer dv sv.
Mar del Zur (Sur)
Mer de Sud
Mare de Sur